

現代日本社会における男らしさ測定尺度の作成¹⁾

Making a Scale of Masculinity in Contemporary Japanese Society

大石 さおり*、北方 晴子**

Saori Oishi, Haruko Kitakata

要旨

本稿では、現代日本における男性役割観について、次の2点を目的として調査を行った。①現代日本社会における男性役割観を測定する尺度の作成、②男性役割観についての考えが性別や年代によって異なるのかについての検討、である。予備調査で収集した186の特性が現代男性にとって重要な程度について、関東1都3県在住の男女419名(10～50代)の回答を対象として分析を行った。①尺度の作成については、最終的に55項目からなる尺度を作成した。尺度の因子構造は、5因子とすることが妥当であった。第1因子より“社会的望ましさ”、“見た目のよさ”、“個性”、“豪快さ”、“精神的強さ”と命名し、これらを現代日本における男らしさ測定尺度の下位概念とした。②については、現代の男らしさの概念には、性別によって考え方が異なる下位概念と年代によって考え方が異なる下位概念が含まれていることが明らかとなった。具体的には、女性は男性より、男性に対し社会的望ましさや豪快さを求めている傾向がみられた。一方で、10代の男女は男性により外見のよさや個性を重要視しているということがわかった。

●キーワード：男らしさ (Masculinity) / 性役割観 (View of Gender Roles) / 因子分析 (Factor Analysis)

I. 研究の目的

近年、男性に期待される役割や男性の特性が変化しつつあることが指摘されている。大学生を含む20代～60代を対象とした調査で、6～7割の男女が軟弱な青年男子が増えていると感じ、特に青年男子自身が軟弱な男子の増加を認識していた。²⁾

性役割観は、それぞれの性に対する社会的期待に基づく意識・観念・信条などで、「男性はこういうものだ」、「女性はこうあるべきだ」といったビリーフである。³⁾ 社会的期待が文化の影響を受けることは避けられない⁴⁾ のと同様、時代による社会の変化の影響も受けるはずである。すなわち、時代を経るにしたがって、性役割観は変化するものといわざるを得ない。

鈴木⁵⁾ は、日米における研究結果を概況し、共通して男性役割に期待される特性をまとめている。(a) 職業上の成功と達成、(b) 肉体的／精神的強さと独立心、(c) 感情表出の制限、(d) 女々しくないこと、の4つである。これまでの性役割観に関する研究には、このような従来の男らしさや男性役割観に基づいて行われているものも多い。しかし、これらは現在の社会で期待されてい

る男性役割観と異なっている可能性がある。

特に心理学の分野では、性役割観を測定する尺度が日本語版の作成も含め複数開発されてきた^{6) 7) 8) 9)} が、これらの多くは2000年以前の研究であり、変化しつつある性役割観の現状に必ずしも対応できているとは言えない。また、性役割に関する研究の大部分が男性性と女性性を一人の人間の中にある2つの心理・行動様式として測定され、記述されるべきもの¹⁰⁾ として考える立場から行われてきた。

しかしその一方で、男性あるいは女性という性別にそれぞれ社会的に期待されている役割やイメージをとらえる視点もまた重要である。その理由として、女性を対象とした研究の蓄積は行われているが、男性を対象とした研究はまだ発展段階にあるため、男性役割に関する研究を行うことの必要性が挙げられる。特に、男性役割を対象にした研究はまだまだ少なく、本邦においては男性役割に対する態度測定尺度もごくわずしか作成されていない。¹¹⁾ したがって、現在の男性に社会的に期待されている役割について調査・研究を行うことに意義があると考えられる。本研究では、現代日本社会で期待されている男性

* 本学助教、被服心理学
** 本学准教授、近現代メンズファッション

の性役割観の現状を把握し、その男性に関する性役割観とメディアや生育環境など複数の社会的要因との関連を探ることを目的とする。その目的に照らし、本稿では現代日本社会で期待される男性の性役割観を測定するための尺度の作成を行う。また、性別や年代別によって男らしさに関する考えが異なるのかについても検討を行う。その際に、先行研究や予備調査で行ったように、「男らしさ」を直接尋ねる方法ではなく、現代の男性にとって重要であるかどうかを尋ねる方法をとった。その理由として、予備調査で「男らしさ」という表現を用いた際にみられた、回答者による性役割意識への抵抗感からくる反発的な態度（代表例として、男女平等が唱えられている時代に「男らしさ」という考え方は古く、回答できないとする態度）が想定されることや、「男らしさ」という表現によりジェンダー・ステレオタイプをわざわざ喚起し、その方向に認知をゆがめてしまう恐れがある¹²⁾ことが挙げられる。したがって、本研究では現代の男性にとって重要であるとされる特性を、現代の男性の性役割観を構成する要素、つまり現代における男らしさとみなすこととする。

II. 方法

オンライン調査会社に委託し、2012年2月23日、24日の2日間で質問紙法によるインターネット調査を行った。埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県在住の15～59歳男女を対象とした。回答者が性別（男女）、年代別（10代～50代）に40名ずつ400名程度となるまで調査を継続した結果、上記2日間で420名の有効票が回収されたため、その時点で調査を終了した。10代（15～19歳）、20代（20～29歳）、30代（30～39歳）、40代（40～49歳）、50代（50～59歳）の各年代の男女それぞれ42名ずつ、合計420名から回答を得た。

フェイスシート項目として、性別、年齢、居住地域、婚姻状況、子供の有無、職業（学生の場合は学生種別も含む）の6項目を尋ねた。男らしさに関する項目として、予備調査で収集した186の現代の男性の特性を表す文章を用いた。「現代の男性にとって、次のような性質をもっていることはどの程度重要であると思いますか。あなたの考えにもっとも近いものを1つだけ選んでください。」という教示文を用い、各項目について、「1. まったく重要でない」から「5. 非常に重要である」までの5段階のリッカート法で調査を行った。

男らしさに関する項目の選定は、予備調査を経て行っ

た。詳細は以下の通りである。

III. 予備調査概要

1. 予備調査目的

現代日本社会における男らしさを測定する尺度を作成するために、現代の日本人男性の特性を表す用語を収集することを目的として調査を行った。

2. 予備調査方法

オンライン調査会社に委託し、2011年4月22日～24日の3日間に質問紙法によるインターネット調査を行った。埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県在住の15～59歳男性を対象とした。回答者が各年代100名程度ずつ、合計500名程度となるまで調査を継続した結果、上記3日間で515名の有効票が回収された。調査協力者の内訳は、10代（15～19歳）、20代（20～29歳）、30代（30～39歳）、40代（40～49歳）、50代（50～59歳）の各年代の男性100名ずつ、合計515名から回答を得た。

フェイスシート項目として、性別、年齢、居住地域、婚姻状況、子供の有無、職業（学生の場合は学生種別も含む）の6項目を尋ねた。また、現代の男性の性役割観を探るために、次の3項目について自由記述で回答を求めた。具体的な項目内容は、「あなたにとって今、『おとこらしさ』を表す言葉とは何か」、「あなたから見た『おとこらしい』人とはどんな人か」、「あなたにとって『おとこらしさ』の条件とは何か」であった。

3. 予備調査結果・考察

「おとこらしさ」を表す言葉、「おとこらしい」人、「おとこらしさ」の条件というそれぞれの項目に対する自由記述回答をテキストマイニングの手法（IBM PASW Text Analytics for Surveys 3.0 使用）を用いて分析した結果、表1の186用語をキーワードとして抽出した。

表1 男らしさに関連する186キーワード

聡明である	短髪である	こだわりをもっている
家族を大切にする	我慢できる	健康である
流行に惑わされない	口が堅い	髪型にこだわる
はっきりとものを言う	愛情がある	力持ちである
臨機応変に対応できる	覚悟がある	自立している
一生懸命に取り組む	弱みを見せない	何でも着こなす
身体的に強い	愛嬌がある	個性がある
動じない	女性に気配りができる	泣かない
余裕がある	人に依存しない	賢い
約束を守る	気合いがある	弱音をはかない
スーツが似合う	暴力的である	漢(おとこ)である
自分の価値観がある	柔らかな物腰である	深い
理性的である	黒髪である	肉食系である
ファッションを楽しむ	根性がある	一匹狼である
寡黙である	亭主關白である	愚痴(ぐち)らない
無骨である	公平である	自然体でいられる
チャラチャラしていない	人付き合いがうまい	冷静である
経済力がある	競争力がある	子ども好きである
女性を守る	ひげを蓄えている	言い訳をしない
カッコいい	自分に厳しい	品がある
チャレンジ精神がある	逃げずに戦う	体型にこだわる
学歴が高い	力強い	正義感がある
怒らない	ワイルドである	度胸がある
気前がいい	毅然(きげん)としている	勉強ができる
結果が出せる	人に好かれる	精神的に強い
男気がある	仕事ができる	ハンサムである
日焼けしている	リーダーシップがある	性的な経験が豊富である
けじめがある	責任感がある	不器用である
年齢を感じさせない	やさしい	ショッピングを楽しむ
いい父親である	自信がある	自由である
背が高い	社会経験が豊富である	おしゃれである
夢をもっている	硬派である	かわいい
哲学がある	誠実である	いざというときに力を発揮する
セクシーである	真面目である	信頼感がある
体格がいい	友情を大切にする	おもしろい
魅力的である	趣味をもっている	もてる
勇気がある	ガッツがある	やんちゃである
攻撃的である	技術力がある	イケメンである
協調性がある	積極的である	人望がある
信念がある	体力がある	着るものにこだわる
自己主張ができる	華がある	自分の生き方をもっている
したたかである	安心感がある	心が広い
知的である	高い志をもっている	包容力がある
クールである	行動力がある	さわやかである
礼儀をわきまえている	若く見える	寛大である
ダンディである	運転(うまい)である	家事が得意である
決断力がある	胸板が厚い	義理堅い
喧嘩が強い	スタイルがよい	情熱的である
人情がある	清潔感がある	忍耐力がある
堂々としている	率直である	意志が強い
正直である	視野が広い	美しい
スポーツが得意である	威厳がある	愚直である
頼りがいがある	なよよしない	魂がある
常識がある	豪快である	職人気質である
柔軟性がある	遊び心がある	マナーが身につけている
たくましい	要領がいい	胸毛がある
従順である	器が大きい	低い声で話す
スマートである	努力家である	芯がある
筋肉がある	一貫性がある	落ち着きがある
戦うことができる	笑顔を絶やさない	大和魂がある
センスがよい	さりげない	思いやりがある
性的能力が高い	紳士的である	面倒臭い

飯野¹³⁾は、男女の性役割観を調査した結果、男らしさに対するイメージには「強さ」や「たくましさ」などの心身両面に使える象徴的な言葉が多かったのに対して、女らしさのイメージは、パーソナリティ特性に関するものと身体的特徴を表すもののが比較的はっきりと区別されていたと指摘している。今回の結果では、男らしさについて、イケメン、筋肉、体格、ひげなど身体的な特徴を表すさまざまな表現が見られた。これまでの調査^{14) 15)}と比較して、男性イメージがより多様化している兆しが見られた。

るものと身体的特徴を表すもののが比較的はっきりと区別されていたと指摘している。今回の結果では、男らしさについて、イケメン、筋肉、体格、ひげなど身体的な特徴を表すさまざまな表現が見られた。これまでの調査^{14) 15)}と比較して、男性イメージがより多様化している兆しが見られた。

IV. 結果・考察

1. 現代日本社会における男らしさ測定尺度の作成

186項目に対する419名の回答を分析の対象とした。1名は、フェイスシート項目以外の全ての項目に対し「どちらともいえない」を選択していたため、信頼性の観点から除外した。まず186項目それぞれについて項目分析を行った。「まったく重要でない」を1、「あまり重要でない」を2、「どちらともいえない」を3、「やや重要である」を4、「非常に重要である」を5として得点化した。

各項目の平均値と標準偏差の和および差を算出した結果、天井効果が確認された項目が5項目、フロア効果が確認された項目が4項目あった。それら9項目は、尺度として不適切であると判断し、削除した。また、各項目の分布を確認したところ、分布に偏りがあるものがあったため、これら23項目を削除した。

残った154項目に対し、各項目の判別妥当性を確認するために、G-P分析を行った。154項目の合計得点の上位25%、下位25%に該当する回答者を抽出した後、上位群と下位群間に各項目得点の平均値に差があることを確認するためにt検定を行った。その結果、2項目に有意差が認められなかったため、それら2項目は、男らしさを判別する項目として不適切であると判断し、削除した。

さらに、残りの152項目に対し、尺度全体の内部一貫性を確認するために、I-R分析を行った。各項目とそれ以外の項目得点の相関係数を算出し、相関係数が0.4以上あることを確認した。その結果、31項目の相関係数が0.4未満であったため、それら31項目を削除した。

残りの121項目のうち、項目内容として重複した意味内容をもつ項目や年齢によって意味の理解に偏りがあると思われる項目を選びだし、これまでの項目分析の結果を加味して不適当と思われる21項目を削除した。

最終的に残った100項目を対象として、因子分析を行った。最初に行った因子分析(主因子法、回転なし)の結果、スクリープロットおよび固有値などを検討し、

4～8 因子が適当であると見当をつけた。そこで、抽出する因子を4～8 因子まで変えながら因子分析（主因子法、プロマックス回転）を繰り返し行い、結果を検討した結果、より単純構造に近く、意味の解釈もしやすいことから、5 因子を抽出することが適当であると判断した。さらに、因子負荷量が0.3 未満の項目や複数の因子

に負荷量の高かった項目を削除することを目的として、5 因子を抽出する設定で、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を6 回繰り返し行った。その過程で45 項目を削除した。最終的に全55 項目の因子分析（主因子法、プロマックス回転）結果を表2 に示す。

表2 現代日本における男らしさ測定尺度因子分析結果

項目	社会的望ましさ	見た目のよさ	個性	豪快さ	精神的強さ
落ち着きがある	.772	.014	-.093	-.021	.026
協調性がある	.762	.009	-.088	-.057	.034
人望がある	.727	.116	.017	.014	-.170
寛大である	.717	.100	-.059	-.016	-.033
柔軟性がある	.717	-.026	.128	-.134	-.103
余裕がある	.716	.126	.032	-.133	.022
忍耐力がある	.714	-.100	.072	-.068	.136
人情がある	.705	-.058	-.119	.234	-.227
けじめがある	.695	-.080	.170	-.039	-.119
公平である	.690	-.191	-.051	.104	.086
真面目である	.669	-.031	-.115	.072	.012
冷静である	.667	-.050	.036	-.231	.287
根性がある	.659	-.098	.140	-.027	.083
人に好かれる	.626	.241	-.045	.065	-.129
自然体でいられる	.584	.076	-.105	.029	-.010
身体的に強い	.580	.051	-.064	.169	.003
度胸がある	.578	-.084	.050	.113	.227
社会経験が豊富である	.561	.113	.055	.036	-.037
毅然(きぜん)としている	.542	.019	-.016	.106	.200
面倒見がいい	.522	.091	.102	-.005	-.006
努力家である	.522	-.050	.197	.158	-.051
覚悟がある	.516	-.110	.246	.051	.068
人付き合いがうまい	.516	.243	.201	-.077	-.163
勇気がある	.516	-.076	.270	.135	-.042
紳士的である	.507	.148	.052	.040	.099
堂々としている	.491	.020	.044	.185	.089
率直である	.485	.060	.056	-.008	.250
さりげない	.459	.180	-.055	.207	-.001
笑顔絶やさない	.455	.223	-.121	.097	.074
一貫性がある	.426	-.118	.246	.075	.117
流行に惑わされない	.420	-.067	-.027	.098	.162
経済力がある	.416	.254	.112	-.022	.033
スタイルがよい	-.033	.760	-.056	-.014	.115
カッコいい	-.003	.704	.110	.060	-.113
若く見える	-.002	.673	-.095	.130	.032
スーツが似合う	-.054	.641	-.079	.229	.086
センスがよい	.108	.641	.228	-.264	.043
ファッションを楽しむ	.054	.631	-.012	.068	.028
年齢を感じさせない	.055	.607	.129	-.029	.041
個性がある	-.098	.108	.737	.078	.018
夢をもっている	.021	.153	.660	-.054	-.033
チャレンジ精神がある	.221	-.007	.652	.004	-.124
自己主張ができる	.236	-.116	.649	-.023	-.007
こだわりをもっている	-.159	.051	.647	.159	.025
はっきりとものを言う	.017	-.077	.591	.083	.101
競争力がある	.141	.065	.475	.026	.089
力持ちである	.055	.099	-.073	.709	.001
豪快である	-.124	.073	.179	.668	.057
硬派である	.038	.101	-.017	.616	.035
たくましい	.152	-.018	.099	.588	-.007
力強い	.191	-.123	.114	.581	.053
男気がある	.199	.038	.177	.483	-.118
弱音をはかない	.103	.016	.005	.005	.790
愚痴(ぐち)らない	.151	.083	-.106	-.042	.789
弱みを見せない	-.219	.130	.235	.195	.624
因子間相関					
社会的望ましさ		.033	.543	.422	.314
見た目のよさ			.304	.356	.229
個性				.395	.279
豪快さ					.335

表2より、第1因子は、「落ち着きがある」、「協調性がある」などの項目が高い因子負荷量を示しており、社会において望まれる態度に関する因子であると考えられる。また、「人望がある」、「寛大である」といった項目も高く負荷していることから、人として社会生活を送る上で望ましいとされる特性を表している因子であると言える。ここから、この因子を“社会的望ましさ”因子と命名した。

第2因子は、「スタイルがよい」、「かっこいい」などの項目が高い負荷量を示していることから、男性の外見的な良さを表している因子であると考えられる。そこで、この因子を“見た目のよさ”因子と命名した。

第3因子は、「個性がある」、「夢をもっている」などの項目が高い負荷量を示していることから、一般的に望まれる特性とは異なる男性それぞれのユニークさを表す項目が集まっていると言える。そこで、この因子を“個性”因子と命名した。

第4因子は、「力持ちである」、「豪快である」などの項目が高い負荷量を示していることから、男性の身体能力と性格が交じった項目群となっている。これらの共通点として、豪放磊落な男性のイメージが読み取れる。そこで、この因子を“豪快さ”の因子と命名した。

第5因子は、「弱音をはかない」、「愚痴らない」などの項目が高い負荷量を示していた。これらの項目は、辛くても弱い面や泣き言を外にもらさない精神的強さを表していると言える。そこで、この因子を“精神的強さ”因子と命名した。

以上の因子分析結果をふまえ、第1～5因子を構成する項目を現代日本における男らしさ測定尺度の下位尺度とする。“社会的望ましさ”は32項目、“見た目のよさ”は7項目、“個性”は7項目、“豪快さ”は6項目、“精神的強さ”は3項目で構成される。また表2より、5因子の因子間相関を見ても、“社会的望ましさ”と“個性”($r=0.543$)、“豪快さ”($r=0.422$)との間には中程度の正の相関がみられた。

各下位尺度の内的整合性を確認するために、クロンバックの α 係数を算出した。“社会的望ましさ”は $\alpha=0.956$ 、“見た目のよさ”は $\alpha=0.841$ 、“個性”は $\alpha=0.828$ 、“豪快さ”は $\alpha=0.808$ 、“精神的強さ”は $\alpha=0.782$ であった。この結果より、全ての下位尺度において α 係数が0.7以上であったことから、下位尺度項目として全55項目を採用することとした。なお、尺度全体の α 係数は、 $\alpha=0.96$ であり、信頼性は十分であるといえる。

2. 社会的属性を用いた男らしさ概念の分析

(1) 項目別の分析

まず、上記で作成した尺度の項目ごとに性別および年代による違いが見られるかどうかを検討するために分析を行った。55項目それぞれについて、男女で平均値が異なるかどうかを検討するために男性209名、女性210名の回答を対象としてt検定を行った結果を表3に示す。

表3より、1%水準($p < 0.01$)で有意差があった項目は、「身体的に強い」($t(417)=5.69$)、「余裕がある」($t(417)=3.62$)、「経済力がある」($t(417)=5.85$)、「男気がある」($t(417)=3.75$)、「けじめがある」($t(417)=4.14$)、「協調性がある」($t(417)=3.23$)、「人情がある」($t(417)=4.26$)、「柔軟性がある」($t(404.82)=3.82$)、「根性がある」($t(407.86)=4.99$)、「人付き合いがうまい」($t(417)=3.43$)、「人に好かれる」($t(417)=3.46$)、「硬派である」($t(409.53)=3.05$)、「真面目である」($t(417)=4.20$)、「努力家である」($t(404.94)=3.86$)、「さりげない」($t(417)=3.61$)、「力持ちである」($t(417)=5.35$)、「自然体でいられる」($t(404.56)=6.49$)、「度胸がある」($t(417)=2.77$)、「人望がある」($t(417)=3.53$)、「寛大である」($t(417)=4.64$)、「忍耐力がある」($t(417)=3.12$)、「落ち着きがある」($t(417)=3.98$)の22項目であった。

5%水準($p < 0.05$)で有意差があった項目は、「スーツが似合う」($t(409.20)=2.27$)、「勇気がある」($t(417)=2.25$)、「堂々としている」($t(417)=2.44$)、「弱みを見せない」($t(417)=2.34$)、「公平である」($t(417)=2.49$)、「競争力がある」($t(417)=2.03$)、「力強い」($t(417)=2.51$)、「社会経験が豊富である」($t(417)=2.37$)、「個性がある」($t(417)=2.12$)、「弱音をはかない」($t(417)=2.48$)の10項目であった。

また、これらの性差がみられた項目のうちで男性の平均値が女性の平均値よりも有意に高かった項目は、「弱みを見せない」、「競争力がある」、「個性がある」、「弱音をはかない」の4項目であった。その他の項目はすべて、女性の平均値が男性の平均値を上回った。男性にとってどの程度重要な特性かを尋ねているために、女性が男性に対しより多くの望ましい特性を重要であると評価することは予想される。実際、全55項目中およそ半数となる28項目において、女性の平均値は男性の平均値より有意に高いという結果となった。女性の平均値が男性より高かったそれらの項目には、人間性に関わる項目(例えば公平さ、落ち着き、寛大さ、真面目さなど)や身体的特徴(例えば身体的強さ、スーツが似合うなど)、ま

表3 性別によるt検定で有意差がみられた項目とその概要

性差がみられた項目	t検定結果	平均値をふまえた結果 (標準偏差)
身体的に強い	**	男: 3.60(±0.84) < 女: 4.05(±0.78)
余裕がある	**	男: 3.79(±0.80) < 女: 4.06(±0.74)
スーツが似合う	*	男: 2.88(±0.98) < 女: 3.11(±1.13)
経済力がある	**	男: 3.77(±0.75) < 女: 4.20(±0.78)
男気がある	**	男: 3.44(±0.89) < 女: 3.77(±0.92)
けじめがある	**	男: 3.82(±0.72) < 女: 4.12(±0.76)
勇気がある	*	男: 3.76(±0.83) < 女: 3.93(±0.79)
協調性がある	**	男: 3.83(±0.77) < 女: 4.06(±0.72)
人情がある	**	男: 3.82(±0.81) < 女: 4.14(±0.72)
堂々としている	*	男: 3.73(±0.78) < 女: 3.91(±0.79)
柔軟性がある	**	男: 3.85(±0.83) < 女: 4.13(±0.70)
弱みを見せない	*	男: 3.15(±0.94) > 女: 2.93(±0.98)
根性がある	**	男: 3.72(±0.85) < 女: 4.11(±0.73)
公平である	*	男: 3.86(±0.80) < 女: 4.05(±0.73)
人付き合いがうまい	**	男: 3.75(±0.85) < 女: 4.01(±0.75)
競争力がある	*	男: 3.67(±0.82) > 女: 3.50(±0.89)
力強い	*	男: 3.41(±0.86) < 女: 3.62(±0.92)
人に好かれる	**	男: 3.75(±0.83) < 女: 4.03(±0.81)
社会経験が豊富である	*	男: 3.64(±0.85) < 女: 3.83(±0.81)
硬派である	**	男: 2.96(±0.88) < 女: 3.24(±1.01)
真面目である	**	男: 3.77(±0.79) < 女: 4.10(±0.79)
努力家である	**	男: 3.79(±0.83) < 女: 4.08(±0.70)
さりげない	**	男: 3.46(±0.84) < 女: 3.76(±0.85)
力持ちである	**	男: 2.98(±1.00) < 女: 3.48(±0.91)
個性がある	*	男: 3.64(±0.80) > 女: 3.47(±0.84)
弱音をはかない	*	男: 3.49(±0.87) > 女: 3.26(±1.00)
自然体でいられる	**	男: 3.71(±0.85) < 女: 4.20(±0.71)
度胸がある	**	男: 3.65(±0.81) < 女: 3.86(±0.75)
人望がある	**	男: 3.87(±0.79) < 女: 4.12(±0.71)
寛大である	**	男: 3.78(±0.75) < 女: 4.11(±0.75)
忍耐力がある	**	男: 3.86(±0.71) < 女: 4.09(±0.79)
落ち着きがある	**	男: 3.80(±0.78) < 女: 4.10(±0.74)

**p<0.01 *p<0.05

た社会的な成功の要因と強く結びつく項目（例えば経済力、人望、社会経験、忍耐力など）が含まれていた。

一方で、男性自身が主体的に男らしさと結び付けている特性が存在することが示唆された。弱い部分を表現しない傾向、競争力、個性に関する4項目については、現代の男性の特性として、男性が女性よりもより重要であると回答したことが明らかとなった。つまり、競争力や弱さを露呈しないようにすることの重要性を男性がより強く認識している傾向は、男性がこれらの特性を男らしさと結び付けて考えていることを示している。

次に、55項目それぞれについて、10代、20代、30代、40代、50代で平均値が異なるかどうかを検討するために、10代84名、20代84名、30代83名、40代84名、50代84名の回答を対象として一元配置分散分析を行った。その結果有意差がみられた項目に対し、Fisherの最小有意差法による多重比較を行った。なお、分散が等しくない項目に対しては、クラスカル・ウォリス検定を

行い、有意差がみられた項目にのみ、Steel-Dwass法による多重比較を行った。以上の結果を表4に示す。

表4より、一元配置分散分析を行った結果、1%水準(p<0.01)で有意差がみられた項目は、「ファッションを楽しむ」(F(4, 414)=3.40)、「かっこいい」(F(4, 414)=3.64)、「夢をもっている」(F(4, 414)=5.66)、「人付き合いがうまい」(F(4, 414)=5.66)、「スタイルがよい」(F(4, 414)=4.42)、「力持ちである」(F(4, 414)=3.57)、「個性がある」(F(4, 414)=3.96)の7項目であった。5%水準(p<0.05)で有意差がみられた項目は、「硬派である」(F(4, 414)=4.42)、「率直である」(F(4, 414)=2.45)、「紳士的である」(F(4, 414)=2.41)、「面倒見がいい」(F(4, 414)=2.53)の4項目であった。クラスカル・ウォリス検定を行った結果、5%水準(p<0.05)で有意差がみられた項目は、「はっきりとものを言う」($\chi^2(4)=10.75$)、「スーツが似合う」($\chi^2(4)=11.81$)、「笑顔を絶やさない」($\chi^2(4)=10.79$)の3項目であった。

表4 年代間の差の検定結果とその概要

年代差がみられた項目	検定結果	多重比較結果 平均値(標準偏差) ※下3項目は中央値(IQR)記載
ファッションを楽しむ	**	10代:3.42 (±0.94) > 30代:3.06 (±1.08)、40代:3.07 (±0.88)、50代:2.90 (±0.87)
かっこいい	**	10代:3.64 (±0.93) > 20代:3.33 (±0.92)、30代:3.23 (±0.97)、40代:3.26 (±1.00)、50代:3.11 (±0.96)
夢をもっている	**	10代:4.16 (±0.79) > 20代:3.70 (±0.75)、30代:3.64 (±0.86)、40代:3.65 (±0.87)、50代:3.79 (±0.80)
人付き合いがうまい	**	10代:4.21 (±0.71) > 20代:3.90 (±0.91)、30代:3.86 (±0.82)、40代:3.74 (±0.71)、50代:3.69 (±0.77)
硬派である	*	10代:3.24 (±1.02) > 50代:2.90 (±0.83) 20代:3.29 (±0.96) > 30代:2.99 (±1.00)、50代:2.90 (±0.83)
スタイルがよい	**	10代:3.33 (±1.03) > 30代:2.98 (±0.93)、40代:2.99 (±0.98)、50代:2.73 (±0.94) 20代:3.32 (±0.92) > 50代:2.73 (±0.94)
率直である	*	10代:3.88 (±0.85)、50代:3.92 (±0.66) > 20代:3.63 (±0.81)、30代:3.64 (±0.88)
紳士的である	*	10代:4.02 (±0.82) > 20代:3.64 (±0.89)
力持ちである	**	10代:3.54 (±0.89) > 20代:3.20 (±1.07)、40代:3.12 (±0.94)、50代:3.00 (±0.95)
個性がある	**	10代:3.86 (±0.83) > 20代:3.43 (±0.79)、30代:3.49 (±0.83)、40代:3.44 (±0.84)、50代:3.54 (±0.75)
面倒見がいい	*	10代:3.88 (±0.84)、20代:3.85 (±0.85) > 40代:3.60 (±0.71)、50代:3.60 (±0.71)
はっきりとものを言う	*	10代:4.00 (3-4) > 30代:3.00 (3-4)
スーツが似合う	*	10代:3.00 (3-4) > 30代:3.00 (3-4)
笑顔を絶やさない	*	10代:4.00 (3-4) > 30代:3.00 (3-4)、50代:3.00 (3-4)

**p<0.01 *p<0.05

また表4より、多重比較の結果をみると、「ファッションを楽しむ」に対する10代の得点の平均値は、30代、40代、50代と比べ高かった。「かっこいい」、「夢をもっている」、「人付き合いがうまい」、「個性がある」の4項目に対する10代の得点の平均値は、20代、30代、40代、50代と比べ高かった。「スタイルがよい」に対する10代の得点の平均値は、30代、40代、50代と比べ高く、20代の平均値は50代に比べ高かった。「力持ちである」の10代の得点の平均値は、20代、40代、50代に比べ高かった。「硬派である」の10代の得点平均値は50代に比べ高く、20代の平均値は30代と50代に比べ高かった。「率直である」の10代、50代の得点平均値は、20代、30代に比べ高かった。「紳士的である」の10代の得点平均値は20代に比べ高かった。「面倒見がいい」の10代、20代の得点平均値は、40代、50代に比べ高かった。「はっきりとものを言う」、「スーツが似合う」の10代の中央値は30代よりも高かった。「笑顔を絶やさない」の10代の中央値は、30代、50代よりも高かった。

10代は年代間に差がみられたすべての項目をより重要であると評価している傾向が読み取れた。年代間で差がみられた項目としては、対人関係に関するものの中で

も特に他者への接し方や態度に関わる項目（例えば笑顔、紳士的、人付き合い、率直さなど）や外見に関する項目（ファッション、かっこよさ、スタイルのよさなど）などが含まれていた。また、性別と年代との両方で差がみられた項目は、「人付き合いがうまい」、「硬派である」、「力持ちである」、「個性がある」、「スーツが似合う」の5項目であった。これらの項目は、男女で重視する程度も異なるが、年代によっても重視する程度が異なる特性であるといえる。

(2) 下位尺度ごとの分析

項目ごとの性差と年代差の結果をふまえ、さらに全体的に男性観の違いを確認するために、“社会的望ましさ”、“見た目のよさ”、“個性”、“豪快さ”、“精神的強さ”の5つの下位尺度ごとに、社会的属性を要因とした分散分析を行った。用いた社会的属性は、性別、年代、子どもの有無であった。分散分析に際しては、各下位尺度の合計点を下位尺度得点として用いることとした。

表5に、性別、年代別、子どもの有無による現代日本の男らしさ測定尺度下位尺度別人数、平均値、標準偏差を示した。

表5 性別、年代、子どもの有無による現代日本の男らしさ下位尺度基本統計量

		性別		年代					子ども	
		男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	あり	なし
社会的望ましさ	人数	209	210	84	84	83	84	84	278	141
	平均値	119.51	127.14	126.24	122.71	122.36	122.61	122.74	123.19	123.62
	標準偏差	16.90	15.67	15.62	18.71	17.41	17.13	14.48	16.51	17.17
見た目のよさ	人数	209	210	84	84	83	84	84	278	141
	平均値	21.83	22.69	23.69	22.29	21.87	22.10	21.37	22.08	22.63
	標準偏差	4.57	5.13	5.09	4.57	4.84	5.03	4.63	4.98	4.66
個性	人数	209	210	84	84	83	84	84	278	141
	平均値	25.86	25.29	27.07	25.30	25.04	25.02	25.43	25.61	25.50
	標準偏差	4.24	3.80	3.89	4.30	4.28	4.07	3.23	3.92	4.24
豪快さ	人数	209	210	84	84	83	84	84	278	141
	平均値	19.28	20.64	20.83	19.92	19.78	19.83	19.44	20.00	19.88
	標準偏差	3.91	3.95	4.01	4.30	4.03	3.84	3.64	3.93	4.08
精神的強さ	人数	209	210	84	84	83	84	84	278	141
	平均値	10.13	9.60	9.80	9.32	9.71	10.25	10.24	10.03	9.53
	標準偏差	2.23	2.46	2.84	2.64	2.35	2.02	1.69	2.30	2.45

表5に示したデータに対し、下位尺度ごとに2×2×5の3元配置分散分析を行った。その結果、“社会的望ましさ”については、表6に示したように性別の主効果は有意であった(F(1,399)=21.73, p<0.01)が、それ以外の主効果および交互作用は有意ではなかった。なお、表5より“社会的望ましさ”の女性平均値は127.14で、

男性平均値は119.51であった。

“見た目のよさ”については、表7に示したように年代の主効果は有意であった(F(4,399)=3.09, p<0.05)が、それ以外の主効果および交互作用は有意ではなかった。

表6 “社会的望ましさ”分散分析表

	Type III 平方和	自由度	平均平方	F
性別	5855.18	1	5855.18	21.73**
年代	1187.60	4	296.90	1.10
子ども	119.04	1	119.04	0.44
性別×年代	867.25	4	216.81	0.80
性別×子ども	253.17	1	253.17	0.94
年代×子ども	338.12	4	84.53	0.31
性別×年代×子ども	815.23	4	203.81	0.76
誤差	107532.76	399	269.51	
全体	116809.22	418		* p<0.05 ** p<0.01

表7 “見た目のよさ”分散分析表

	Type III 平方和	自由度	平均平方	F
性別	71.58	1	71.58	3.06
年代	289.23	4	72.31	3.09*
子ども	0.05	1	0.05	0.00
性別×年代	79.91	4	19.98	0.85
性別×子ども	0.35	1	0.35	0.02
年代×子ども	131.61	4	32.90	1.41
性別×年代×子ども	58.29	4	14.57	0.62
誤差	9334.90	399	23.40	
全体	9935.12	418		* p<0.05 ** p<0.01

なお、LSD法による多重比較の結果、表8の通りとなった。10代と30代(MSe=2.44, p<0.05)、10代と40代(MSe=2.14, p<0.05)、10代と50代(MSe=3.11, p<0.05)の平均値の差が有意であった。表5より、10代の“見た目のよさ”平均値は23.69で、20代の平均値は22.29、30代は21.87、40代は22.10、50代は21.37であった。

表8 多重比較結果(LSD法)

	20代	30代	40代	50代
10代	=	>	>	>

“個性”については、表9に示したように年代の主効果は有意であった(F(4,399)=3.62, p<0.01)が、それ以外の主効果および交互作用は有意ではなかった。

表9 “個性”分散分析表

	TypeⅢ平方和	自由度	平均平方	F
性別	56.17	1	56.17	3.53
年代	230.57	4	57.64	3.62**
子ども	0.53	1	0.53	0.03
性別×年代	81.60	4	20.40	1.28
性別×子ども	10.64	1	10.64	0.67
年代×子ども	36.66	4	9.17	0.58
性別×年代×子ども	20.91	4	5.23	0.33
誤差	6355.60	399	15.93	
全体	6776.53	418	* p<0.05 ** p<0.01	

表10 多重比較結果 (LSD法)

	20代	30代	40代	50代
10代	>	>	>	>

なお、LSD法による多重比較の結果、表10の通りとなった。10代と20代 (MSe=2.88, p<0.05)、10代と30代 (MSe=3.30, p<0.05)、10代と40代 (MSe=3.32, p<0.05)、10代と50代 (MSe=2.67, p<0.05)の平均値の差が有意であった。表5より、10代の“個性”平均値は27.07で、20代の平均値は25.30、30代は25.04、40代は25.02、50代は25.43であった。

“豪快さ”については、表11に示したように性別の主効果は有意であった (F(1,399)=8.67, p<0.01)が、それ以外の主効果および交互作用は有意ではなかった。なお、表5より、“豪快さ”の女性平均値は20.64で、男性平均値は19.28であった。

表11 “豪快さ”分散分析表

	TypeⅢ平方和	自由度	平均平方	F
性別	134.47	1	134.47	8.67**
年代	85.31	4	21.33	1.38
子ども	24.41	1	24.41	1.57
性別×年代	56.95	4	14.24	0.92
性別×子ども	15.37	1	15.37	0.99
年代×子ども	26.37	4	6.59	0.43
性別×年代×子ども	30.10	4	7.52	0.49
誤差	6184.92	399	15.50	
全体	6621.39	418	* p<0.05 ** p<0.01	

“精神的強さ”については、すべての主効果および交互作用は有意ではなかった。

以上の分散分析結果より、“精神的強さ”を除いたすべての下位概念において、社会的属性による違いが認められた。性別によって考え方に違いが見られたのは、“社会的望ましさ”と“豪快さ”であった。女性は、男性よりも現代の男性に社会的に望ましいとされる特性や豪快さをより求めている傾向が読み取れた。一方、年代によって考え方に違いが見られたのは、“見た目のよさ”と“個性”であった。10代は30～50代よりも現代の男性に外見的なよさを求めている傾向が読み取れた。また、10代は他のすべての年代よりも男性に個性をより求めていることがわかった。子どもの有無による考え方の違いは確認できなかった。

V. 結論

本稿では、現代の日本社会における男らしさを測定するための尺度の作成を行った。尺度の信頼性を検討した結果、本尺度の信頼性は十分であったと言える。また、男らしさの下位概念として、“社会的望ましさ”、“見た目のよさ”、“個性”、“豪快さ”、“精神的強さ”の5つの概念を抽出した。今回の探索的因子分析の結果では、5因子の因子間相関がやや高いものが含まれた。そのため、5因子構造が妥当であるかどうかについては、今後検証的因子分析を行う必要があるといえる。しかし、現段階で抽出されたこれら5つの概念については、既存研究と共通する概念としない概念があり、これまで用いられてきた性役割を測定する尺度の前提となっている男性役割観と現状では異なっている可能性が指摘できる。

“社会的望ましき”は、M-H-F ScaleにおいてHumanityと名付けられた概念¹⁶⁾と似通った内容の項目が含まれていた。性役割測定尺度であるM-H-F Scaleでは、Humanity概念に忍耐強い、心の広い、頭の良い、明るい、暖かいなどの項目が含まれ、男性役割と女性役割の双方において最も高く価値が付与される概念である。¹⁷⁾このことから、現在の男性役割観においても社会的に望ましいとされる人間性に関する内容が含まれているという点には変わりがないことがわかる。

一方、“見た目のよさ”については、これまでの性役割観研究において見られることのなかった概念であるといえる。女性役割として、例えば、かわいい、おしゃれな、¹⁸⁾容貌の美しい¹⁹⁾などの項目はこれまでであったが、男性役割観の下位概念として抽出されることはなかった。この理由として、これまでの男性性と女性性の双方を測定する性役割測定尺度では、外見的美しさなどに関わる項目は、女性に対して用いられる形容詞が多く使用されたこともあり、結果として女性性に属する概念に含まれてきたことが挙げられる。また、本研究と同様に男性役割観のみを扱った尺度においては、大学生や20歳以上を対象としていたため、幅広い世代の男性役割観が反映されていなかった可能性もある。年代差の分析結果では、10代の若者の“見た目のよさ”に関連する項目に対する評価が高かったことから、“見た目のよさ”を現代の男性にとって重要であると評価する人々も実際には一定程度存在しているといえる。

次に、性別や年代の違いによって項目ごとの回答の違いがあるかを検討した。性別によって差があった項目は32項目であり、そのうち男性が女性よりも男性によってより重要であると評価した項目は、4項目であった。その内容は、弱さを露呈しないようにする傾向、競争力、個性に関する内容であり、これらの特性を女性よりも男性が男らしさと結び付けて考えている傾向が読み取れた。男性よりも女性のほうが、男性にとってより重要であると評価した残りの28項目は、主に、人間性や身体的特徴、社会的な成功の要因と関連した内容を含んでいた。

年代によって差があった項目は14項目であった。その内容は、対人関係や外見に関するものなどであった。これらすべての項目で10代は他のいくつかあるいはすべての年代よりも、男性にとってより重要であると評価する傾向がみられた。

また、“社会的望ましき”、“見た目のよさ”、“個性”、

“豪快さ”、“精神的強さ”の5つの下位概念ごとに、社会的属性による考え方の違いを検討した。その結果、現代の男らしさの概念には、性別によって考え方が異なる下位概念と年代によって考え方が異なる下位概念が含まれていることが明らかとなった。

すなわち、女性は男性よりも、現代の男性に対し社会的に望ましいとされる特性や豪快さに関する特性をより求めている傾向がみられた。なお、男性に対し社会的に望ましいとされる特性を女性のほうが期待するという傾向は、似通った概念であるHumanityにおいても見られることが指摘されている。²⁰⁾

その一方で、10代の男女は30代、40代、50代と比べて男性により外見的なよさを求めており、かつ他の年代と比べ、男性にとってより個性を重要視しているということがわかった。このように、10代は30～50代よりも見た目のよさを重視する傾向と20～50代よりも個性を求める傾向があることが確認できたが、このことのみで若い世代の男らしさについての考え方が他の世代と比べ変化しているということは言えない。今の10代が年齢を重ねた後に同様の傾向が見られることが確認された場合に、男らしさの考え方が時代を経て変化している可能性があるといえる。これについては、縦断的な研究成果を待たなければならない。

今後は、このような男らしさについての考え方は、どのようなプロセスを経て形成されるのか、男らしさについての考え方の形成に影響を与えると思われる要因を探りたい。具体的には、メディアとの関わり方や生育環境などを要因として取り上げ、それらの要因と男らしさについての考え方の違いを検討する予定である。

注

- 1) 本研究は、服飾文化共同研究課題「現代における『男らしさ』の構築と男性ファッション誌の役割 1980年代以降、メンズノンノ誌を中心に」(研究代表者：北方晴子；共同研究番号：22010)の一環として行った。
- 2) 高井範子・岡野孝治「ジェンダー意識に関する検討Ⅱ—軟弱な青年男子が増えているのか?—」日本心理学会『日本心理学会第73回大会発表論文集』2009, 1381.
- 3) 中村延江「性役割意識の破綻と中年期の心身症—心理的アプローチの検討—」日本心身医学会『心身医学』38(3), 1998, 181-187.
- 4) 鈴木淳子「脱男性役割態度スケール(SARLM)の作成」日本心理学会『心理学研究』64(6), 1994, 451-459.
- 5) 鈴木, 1994.
- 6) 柏木恵子「青年期における性役割の認知」日本教育心理学会『教育心理学研究』15(4), 1967, 193-202.
- 7) 伊藤裕子「性役割の評価に関する研究」日本教育心理学会

- 『教育心理学研究』26(1), 1978, 1-11.
- 8) 鈴木, 1994.
 - 9) 林 真一郎「男性役割規範尺度日本語版(JMRNI)の作成」上智大学心理学科『上智大学心理学年報』26, 2002, 135-144.
 - 10) 伊藤裕子「性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度(ISRS)作成の試み—」日本教育心理学会『教育心理学研究』34(2), 1986, 168-174.
 - 11) 鈴木, 1994.
 - 12) 児玉真樹子・杉本明子・松田文子「現代の男女大学生の性格特性と性役割認知」広島大学大学院教育学研究科心理学講座『広島大学心理学研究』(2), 2002, 73-84.
 - 13) 飯野晴美「『男らしさ』『女らしさ』の自己認知と性役割観」明治学院大学『明治学院論叢』(600), 1997, 49-61.
 - 14) 飯野, 1997.
 - 15) 高井範子・岡野孝治「ジェンダー意識に関する検討—男性・女性性を中心にして—」『太成学院大学紀要』11, 2009, 61-73.
 - 16) 伊藤, 1978.
 - 17) 伊藤, 1978.
 - 18) 伊藤, 1978.
 - 19) 柏木, 1967.
 - 20) 伊藤裕子・秋津慶子「青年期における性役割観および性役割期待の認知」日本教育心理学会『教育心理学研究』31(2), 1983, 146-151.